

日本語学会第 153 回大会発表要旨

The 153rd Meeting of the Linguistic Society of Japan
Abstracts of Oral presentations, Poster presentations, and Workshops

期 日 : 2016 年 12 月 3 日 (土) ・ 4 日 (日)

会 場 : 福岡大学

〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈 8 丁目 19-1

Dates: December 3-4, Sat.-Sun., 2016

Venue: Fukuoka University

Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, Aichi Pref. 464-8601, Japan

第 1 日 (11 月 28 日)

13:00-17:40 口頭発表 (A 棟地下 1 階, 2 階, 4 階)

第 2 日 (11 月 29 日)

10:00-12:00 ワークショップ (A 棟地下 1 階, 2 階)

11:30-12:50 ポスター発表 (A 棟 7 階 A707)

13:20-16:20 公開シンポジウム (A 棟地下 1 階 AB01)

Day1

13:00 - 17:40 Oral presentations

(A-Building Basement and Floors 2 and 4)

Day2

10:00 - 12:00 Workshops

(A-Building Basement and Floor 2)

11:30 - 12:50 Poster presentations

(A707, The 7th floor of A-Building)

13:20 - 16:20 Symposium

(AB01, A-Building Basement)

■口頭発表（12月3日（土） 13:00-17:40）

[A-1]

文処理脳メカニズムにおける構造的距離と線的距離の処理負荷の分離

岩淵 俊樹，幕内 充

かき混ぜにおけるフィラー・ギャップ間の線的距離に応答する脳領域と構造的距離に応答する脳領域が分離していることを示す。本研究は語順（正準／かき混ぜ）および名詞句の重さ（重主語／重目的語）を操作し、4条件の刺激を作成した。主語が長く目的語が短い重主語かき混ぜ文（例. [[バレリーナを][[軽薄な態度のコーチが][t[叩いた。]]]]）は、目的語が長く主語が短い重目的語かき混ぜ文（例. [[悪趣味な格好のバレリーナを][[コーチが][t[叩いた。]]]]）に比べフィラー・ギャップ間の線的距離が長い、構造的距離は等しい。これらの文を理解する際の脳活動を fMRI で計測した結果、左下前頭回弁蓋部および左後部中側頭回は名詞句の重さに関わらずかき混ぜ文で活動が上昇し、左前頭弁蓋の op9 という領域の活動は重主語かき混ぜ文のみで高い活動を示した。前者の 2 領域は構造的距離に、後者は線的距離に応答すると考えられる。

[A-2]

日本語の二重目的語構文の理解
—語順と名詞句の有生性の影響について—

トウ エン，カフラマン バルシュ，広瀬 友紀

本発表では、二格名詞句とヲ格名詞句の両方が無生名詞もしくは両方が有生名詞に統制した上、二格名詞句とヲ格名詞句が相互に交換可能な文に限定し、二重目的語構文における二格名詞句とヲ格名詞句の有生性と名詞句の語順の関係について検討を行った。自己ペース読文課題による文理解実験の結果から、ヲ格名詞句と二格名詞句が有生名詞である場合、動詞において「をに」語順と「にを」語順に読み時間の差が見られなかった。これに対して、ヲ格名詞句と二格名詞句が無生名詞である場合、「をに」語順よりも「にを」語順のほうが動詞における読み時間が長く、「をに」語順のほうが処理負荷が低いことが示された。本発表では、ヲ格名詞句と二格名詞句が無生名詞でありかつ名詞句が相互に交換可能である場合には、「をに」語順が基本語順であるという可能性について論ずる。

[A-3]

日本語における言い換え型の右方転位構文に関する考察

山内 昇

本発表は先行節内の語句を言い換えた語句が文末に生起する右方転位構文において、可能な言い換えがどのように制限されるのかを考察する。富樫 (2000) では以下3つの制約を提案されている。①先行要素と転位要素の指示対象は一致していなければならない、②転位要素の情報は先行要素よりも限定されていなければならない、③先行要素の情報に認められる曖昧性は転位要素でも維持されていなければならない。本発表では新たに、転位要素がより限定された情報を表していなくても容認される事例、転位要素がより限定された情報を表していても容認されない事例、先行要素と転位要素が表す情報の曖昧性が一致していなくても容認される事例を提示し、上述の制約を再考する。代案として「可能な言い換えは、先行節内の語句から補足情報として想起される事柄と転位要素との間に同一指示関係が成立する範囲に限られる」という制約を提案する。

[A-4]

V スギル構文の解釈の統語的決定

東寺 祐亮

V スギル構文「花子は派手な帽子を買いすぎた」という文は、「帽子をあまりにたくさん買った」という解釈だけでなく、「買った帽子が派手すぎた」という解釈をも許す。V スギル構文はどのようにして動詞以外の要素の過剰性を述べることができるのだろうか。由本 (2005) は、問題の解釈がスギルと「派手な」のような「スケールを表す語」の統語的關係に基づいて生じると提案している。しかし、本発表では、スギルと「スケールを表す語」が統語的に関係づけられるために生じるのではなく、スギルと「帽子」とが統語的に関係づけられることによって、「派手な」について過剰性を述べる解釈ができるようになるという分析を提案する。

[A-5]

日本語受身文の歴史

—除項ラレと加項ラレ—

林下 淳一, 後藤 睦, 金水 敏

現代日本語には動作主がニ格名詞句として現れるニ受身文とニヨッテ句として現れるニ

ヨッテ受身文が存在する。歴史的にニ受身文は昔から存在する一方、ニヨッテ受身文は 19 世紀後半に導入されたとみられる (金水 1993)。

ニヨッテ受身は英語などの受身文と同様外項を減らす受身接辞「除項ラレ」が関与していると考えられる (Kuroda 1979)。よって、山田 (1908), Kuroda (1979) に従い、ニ受身文は主語が心理的受影者を基本とし、常に心理的受影者を項として加える「加項ラレ」が関与すると見れば、ニヨッテ受身文導入を除項ラレの導入と解釈しうる。

しかし、本発表では、Hayashishita & Takai (2016)の現代語ニ受身文の中に除項ラレが関与するものが存在するという議論に基づき、古文のニ受身文にも除項ラレが関与するものがあると論ずる。つまり、除項ラレは昔から日本語に存在していたと結論する。

[A-6]

日本語の願望構文における格付与

中村 渉

本発表は補助形容詞「ほしい」を伴う願望構文の補部の意味上の主語が主格標示又は与格標示を受けることを役割・指示文法の複文の類型論を踏まえて説明する。役割・指示文法は単文の統語構造を内核 (nucleus)、中核 (core)、節 (clause) の 3 層構造を持つ構成素投射と上記各層を修飾するアスペクト辞、否定辞、時制辞等が構成する操作子投射に分けた上で、複文を、①結合する層のタイプ (接続: 内核/中核/節) 及び②層の結合様式 (接合: 等位/連位/従位) を組み合わせることにより、9 通りに分類する。この複文の類型論に基づいて、願望構文の補部の意味上の主語の格交替は、願望構文が中核全体を補部として埋め込む中核従位接続 (core subordination) であるか、2 つの中核が中核項 (= 補部の主語) を共有する中核等位接続 (core coordination) であるかに応じて生じることを主張する。

[A-7]

目的性従属疑問文の解釈と構造

富岡 諭

日本語、韓国語には、「タイポがないか、太郎はその論文をもう一度読み直した」といった文に見られるように、従属疑問文が通常では疑問文を選択しない動詞とでも共起する場合がある。本発表ではこのタイプの従属疑問文 (目的性従属疑問文)、及びその主文部との解釈上の関係を形式意味論的観点から分析する。目的性従属疑問文は、「新しい情報を得る」という目的の存在が動詞句レベルで含意されているものとのみ共起できるという一般化に

基づき、新しい情報を得るといった目的の存在を、その情報を答えとする質問の存在の含意と関連付けられると主張する。更に「質問の存在の含意」から McConnel-Ginet (1982)の副詞句の分析、Dekker (1992)の存在解放の概念をベースにして、目的性従属疑問文が目的性を加えられた動詞句により意味論的に選択されるシステムを提案し、また句レベルでの意味論的選択が文構造に与える影響にも言及する。

[B-1]

滋賀県湖北方言の存在動詞と名詞句階層・アスペクト・待遇範疇

脇坂 美和子

滋賀県湖北方言には人や物の存在を表す動詞にイル・ヤアル・ヤンス・オル・ヨオル・アルの 6 種類の区別があり、それぞれを起源として文法化したと考えられる形式のアスペクト・待遇性などの範疇を示す接尾辞が存在する。これらの存在動詞には主語との間に共起制限があり、この制限には主語となる名詞句の有生性の階層との対応が見られる。また、有生物の存在を表す場合には、話者の主語または所有者に対する待遇性の表示が義務的になる。

本発表では、湖北方言においてこれらの文法範疇が述語形式にどのように標示されるかを記述した上で、そのふるまいから名詞句階層がこの方言の存在動詞とアスペクト接辞の選択に大きく関与していることを主張する。また、この現象を方言類型論的な観点から検討すると、湖北方言が従来の複合型アスペクトとされる類型に近い性質とこれを逸脱する特性を併せ持ち、方言の述語構造の分析に新たな視点を提供し得ることを示す。

[B-2]

南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇の記述

青井 隼人

本発表の目的は南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇を記述することである。多良間方言はピッチ下降の有無と位置によって弁別される三型アクセント体系をもつ。ところがいくつか環境ではピッチの上昇が観察されることがあることが先行研究で指摘されている。ただしそれらの記述は散発的なものに留まっているため、このピッチ上昇がどのような条件で、どのような位置に、どのような要因によって生じるのかは十分に明らかにはされていない。本発表では、先行研究の記述に加えて現地調査によって新たに収集したデータを示しながら、多良間方言におけるピッチ上昇の記述をおこなう。結論として、以下の 3 点を主張する：①ピッチ上昇が生じるのは必ず 2 つ目以降の韻律句（文節）である；②ピ

ッチ上昇が実現するためには当該韻律句よりも前の句でピッチ下降が実現している必要がある；③ピッチ上昇が生じる位置は下降が予測される位置の1モーラ右である。

[B-3]

南琉球宮古語池間西原方言における否定文の特徴と情報構造との関係性

林 由華

日本語の（動詞述語）否定文には、主に動詞の否定形によるものと、ノデハナイによるものがあり、否定のスコープが異なることが知られている。池間西原方言の否定文においても、動詞の否定形を用いる方法と、名詞化節をコピュラ否定形により否定する方法がある。本発表では主に前者の動詞の否定形による否定文を扱い、日本語と対照しつつ次のことを示す。

- 単文では日本語のノデハナイのような広い否定のスコープをとる。
- 情報構造上無標な否定文においては、否定のフォーカスの要素かどうか（どこが否定されるか）に関わらず、義務的に述語より前の項のすべてが非焦点形（いわゆる主題形）となる。一方で、このように項がすべて非焦点形（主題形）になるという特徴は、肯定文においても、動詞が述語焦点形式と呼ぶ形を取った場合に見られるものである。つまり、否定文はデフォルトで述語焦点文と同様の情報構造標識上の特徴を持っているといえる。

[B-4]

自然談話における宮古島池間方言の *nyaan* について

—使用頻度に基づく意味機能拡張の仮説—

呉 唯

池間方言における補助動詞 *nyaan* には、「完了」のアスペク的な意味に加えて、日本語標準語の「～てしまう」と類似する機能——「非実現バイアス」（実現しなかった方がいいという話者の評価）がある。先行研究では、「腐る」のような「ものの正常な機能の消失」を表す「準消失動詞」と組み合わせることが *nyaan* の意味拡張の動機とされていたが、調査した談話データからは合計 72 例中 2 例の「準消失動詞」との組み合わせしか見つからなかった。

そこで、本発表では、「話者が動作主と一致しない場合に多用されること」が「非実現バイアス」が生じた主な要因であることを主張する。興味深いのは、梁井(2009)によると、日本語の「～てしまう」は話者と動作主が一致しない例が多く、それが動機となりマイナス

の感情・評価的意味が焼き付けられたと言う。この言語事実は、まさに *nyaan* の「非出現バ
イアス」の表出と平行的に捉えられる。

[B-5]

聞き手の情報処理に対する話者の推測はフランス語
接続法の用法にどのような影響を与えるか？

— *le fait que* と *Pourquoi crois-tu que …?* の後の叙法選択と関連性理論

井上 大輔

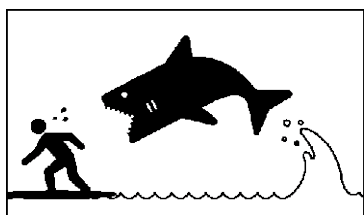
従来、フランス語の接続法と直説法の選択は、従属節の事実性により決定されると考えられてきた。だが、こうした説明では、事実を明確に表す感情表現に接続法が用いられる理由が説明できない。そのため現在では、接続法の選択を決めるのは、従属節の事実性ではなく、接続法のもつ「話者の真偽判断の停止を表すモダリティ」に基づいていると考えることが多い。接続法は「真偽判断の判断にコミットしない話者の態度」の表明(守田 2015)であるという考えは、同じくロマンス語に属するスペイン語の接続法の分析(和佐 2005)でも用いられているので、妥当性が高いと考えられる。だが、コーパスで接続法の用法を調べてみると、前提であることが明白なケースにおいても直説法が使われているケースが観察される。本発表の目的は、語用論的観点、特に関連性理論を考慮することで、接続法の用法の持つ複雑さの原因を明確化することにある。

[B-6]

日英語母語話者の事態の描き方の違いは事態の捉え方の違いの反映といえるか

伊藤 創

英語母語話者と日本語母語話者は、図1のような動作の働きかけを行う参与者とその働きかけを受ける参与者が描かれた事態を提示した場合、前者は働きかけを行う側の参与者を主語に立てる傾向が強いのに対し、後者は、働きかけを受ける側として主語に立てる傾向が強い。本研究では、この〈描き方〉の違いが、事態の〈捉え方〉の違いに根ざしているのかを検証するため、図1のような画像15枚について、描かれている事態の〈次〉に起こった事態を自由に想像して描かせる調査を行ったが、同調査では、英語母語話者は、動作の働きかけを行う参与者を主語に、日本語母語話者は働きかけを受ける参与者を主語に立てるという大きな傾向差は見られなかった。本発表では、この調査結果から、日英語母語話者の間で事態の〈描き方〉には大きな傾向差が見られるものの、それが必ずしも両言



話し者の事態の〈捉え方〉の違いに根ざしたものではない可能性を指摘する。

図 1.

[B-7]

感情・感覚を表す擬態語の語彙特性についての考察
—擬態語動詞の観察を中心に—

吉永 尚

感情・感覚など心身状況を表す擬態語を分類して本質的な語彙特性について考察し、擬態語動詞の意味的相違は文法的相違に関与し、畳語、促音などの形態的特徴も文法的性質に関与することがわかった。TypeA（擬態語動詞）、TypeB（擬態語動詞・擬態語形容詞）、TypeC（擬態語形容詞）、TypeD（擬態語副詞）の4種に分類し文法的性質を観察したが、Aはアスペクト性（「○●○○●」型のは持続性、「○っと」、「○っ●り」型のは瞬間性）が見られ、Bは殆ど見られなかった。Aは感情・感覚主体の直接的な状況を表現するが、Bは主体の対象に対する感覚を表し形容詞的意味合いが強いためアスペクト性が弱いと判断する。また、Aでは生理的感覚を表すものはBと同様に能格性を、心理的感情を表すものは非能格性を示した。副詞用法に特化したDはオノマトペ度が最も高く、A（感情）、A（感覚）、B、C、Dの順で動詞性が高く名詞性が低いことから、オノマトペの本質は名詞性にあるということが推測される。

[C-1]

Variable telicity of nonculminating accomplishments in Japanese

Takayuki IKEZAWA

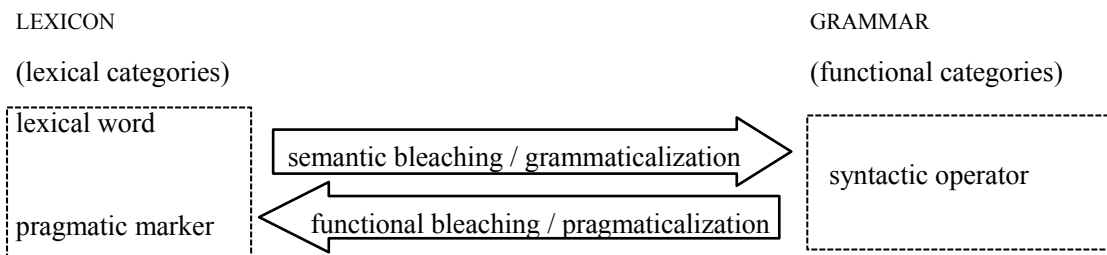
English lexical causatives only have the culminating (telic) reading, but Japanese ones also have the nonculminating (atelic) reading. I propose that this difference arises because while English lexical causatives are associated with the causative event structure, Japanese ones are associated with the activity event structure. Thus ‘open(tr)’ basically describes an action that would lead to opening of the object. But because of the existence of the culmination point, ‘open(tr)’ turns out to entail culmination, just as read a book does. That ‘open(tr)’ is an accomplishment with a lexically specified activity event in the sense of Rothstein 2012. Since such a predicate can have the atelic reading as suggested by Rothstein (2012), ‘open(tr)’ has that reading.

[C-2]

Pragmaticalization as functional bleaching and expressive enrichment

Lukas RIESER

This paper proposes a new view of pragmaticalization accounting for the development of Japanese *no* from nominalizer / complementizer to stance marker, which is not fully compatible with extant accounts that assume a shift from propositional to discourse-oriented meaning. In the model shown below, *no* undergoes a process of functional bleaching parallel to pragmaticalization, the counterpart of semantic bleaching parallel to grammaticalization. Functional bleaching precedes the rise of new (expressive) meaning, while semantic bleaching precedes the rise of new (syntactic) function. The proposed analysis provides a new way of thinking about the relation of lexicon and grammar in language change.



[C-3]

格助詞「へ」で終わる新聞見出しについて

劉 吉香

新聞の見出しは限られた字数でより多く情報を簡潔かつ正確に伝えるため、短縮された表現が使われる、通常の文と違う表現形式が多く見られる。助詞止めは見出しの大きな特色と言える。

本稿では助詞止めの見出しの中によく現れる「へ」で終わる見出しに注目し、見出しを止める「へ」の特徴を探ってみたい。具体的には、読売新聞のデータベースを利用し、読売新聞の2014年一年分の一面の主見出しを取り出し、考察対象としている。その一年分の主見出しにおける「へ」で終わる見出しについて、通常の文の格助詞「へ」の使い方との比較、そして「動作性名詞+へ」で止める見出しと動作性名詞だけで止める見出しとの比較を通し、用例をあげながら、見出しを止める「へ」の使い方を明らかにする。

[C-4]

談話における使用から見るいわゆる提題の「って」

大江 元貴

「田中って誰?」「田中さんって変な人ですね。」のような「って」は従来、前接名詞や命題の意味的性質に注目して分析がなされてきた。本発表では、「日本語自然会話書き起こしコーパス」の量的調査などにに基づき、「って」が内容自立の文に現れないこと、「って」が現れる文のモダリティが「疑問」「説明」に大きく偏ることを示し、「って」は本来的に話し手・聞き手の談話理解に関わる助詞であることを主張する。また、従来の分析からは説明がしにくかった、「今日の田中さんのシャツって{?花柄/おしゃれ}ですね。」のような対立や「お手ふきっていただけます?」のような実例について検討し、Tannen & Waller (1993)のフレーム概念を援用して、「って」が『対象の言語的理解』のギャップを示す標識 > 『対象に関する知識スキーマ的理解』のギャップを示す標識 > 『発話(行動)の理解』のギャップを示す標識」という拡張を遂げている可能性について論じる。

[C-5]

等位接続の一般用法について

浅田 裕子

本発表は、日本語と日本手話(JSL)の観察に基づき、Davidson (2013) がアメリカ手話(ASL)について提案している等位接続の一般用法の分析を支持する。ASLには、同一の等位接続詞(*coord*)が使われている等位接続文において、連言的・選言的解釈の両方が容認される一般用法が存在する。

(i) MARY HAVE [TEA *coord* COFFEE] (MAYBE BOTH/DON'T KNOW WHICH).

Davidsonによれば、この一般用法では、等位構造の外にある要素が代替集合の量化を認可し、連言的・選言的解釈をつくりだす。そして、そのような量化を認可する要素として、①文脈 ②BOTH, WHICH など文中の言語要素 ③顔きなどの非手指記号、の三種類を挙げている。本発表では、ASL・日本語・JSLの三言語に共通する①と②に関する観察を踏まえ、認可される量化の局所性には言語間で差異があることを指摘する。

[C-6]

日本手話の条件文：うなずき型とロールシフト型

原田 なをみ, 高山 智恵子, 坊農 真弓

本研究では、日本手話の条件文の統語的側面の調査について、国立情報学研究所で開発中の「日本手話話し言葉コーパス」のデータを用いて調査を実施した。世界の手話言語の条件文の研究では、文の左端に条件節が表出され「上がった眉」という非手指表現を伴うことが観察されている (Dachkovsky 2004、Pfau 2008)。一方、日本手話の研究では、条件節の非手指表現としては、眉の位置と同等のものが見られるという観察 (岡・赤堀 2011) と、眉の位置よりむしろ頭の位置で条件節が示される (市田 2005) という観察がある。上述のコーパスを用いて長崎県のろう者 (16 名 8 組) のカレーの作り方に関する対話データを分析した結果、これまで観察されてきたうなずきを用いた条件文 (うなずき型) (28 例) 以外に、ロールシフト (RS と省略) を用いる表現 (RS 型) も多出する (22 例 ; 44 パーセント) ことが明らかになった。

[C-7]

日本手話のモダリティ表現にみられる証拠性

松岡 和美, 矢野 羽衣子, 前川 和美

証拠性 (evidentiality) とは、「認識のモダリティの形式類型のうち、話し手の外部に存在する情報を観察したり取り入れたりすることを通して、認識が成立していることを示す形式」である (日本語記述文法研究会 2009:164)。本研究では、Akahori et al. (2013) で考察された日本手話のモダリティ表現を取り上げ、証拠性に注目する例文を用いてその性質を検討した。日本手話のモダリティ表現は動詞に後続する位置に現れる (田中 来る MODAL5 「田中が来るに違いない」)。3 つの例文のそれぞれに証拠性の有無にかかわる 3 種類の文脈を設定し、澤田 (2006:7) による「報告的」「感覚的」証拠性の区別にも配慮しながら、10 種類のモダリティ表現の使用が可能かを考察した。その結果、蓋然性の高低と証拠の必要性によって 10 種類のモダリティ表現が異なるタイプに分類できることが示された。

[D-1]

分散形態論における複合語マーカー

大久保 龍寛

Ralli (2008) は複合語以外の環境では生じない要素(複合語マーカ)の存在を指摘した。複合語マーカは、様々な言語で観察され、またその形式も多様である (cf. Shimada et al. (2014))。例えば、ギリシャ語は複合語マーカ専用の形態素を持ち(例: domat-o-salata ‘tomato salad’における-o-)、ドイツ語は複合語中にしか生じない特殊な形式の語幹を持つ(例: Woll-kleid ‘woolen dress’における Woll (cf. Wollen))。また、英語の新古典複合語に見られるように、複合語マーカは複合語中に複数生じることもある(例: psych-o-logy)。

本発表の目的は、複合語の構造を分散形態論の枠組み (Embick and Noyer (2007)) に基づき構築したうえで、その構造に基づき複合語マーカが示す上述のようなふるまいを説明することにある。

[D-2]

デキゴト名詞句内における属格照合のメカニズム: ロシア語・ドイツ語からの検証

宮内 拓也, 伊藤 克将

ロシア語やドイツ語において、デキゴト名詞に後置される属格名詞が受け取る意味役割に関しては、デキゴト名詞の種類によって制限がある。具体的には、属格名詞が動作主のみを受け取ることができるデキゴト名詞 (タイプ 1)、属格名詞が動作主・被動作主いずれも受け取ることができるデキゴト名詞 (タイプ 2)、被動作主のみを受け取ることができるデキゴト名詞 (タイプ 3) が存在する。本発表では分散形態論の枠組み (Harley 2009) を採用し、デキゴト名詞の形態 (Babby 1997, Rapp 2006) を根拠に、タイプ1とタイプ2・3に別の統語構造を想定する。その上で、narrow syntaxにおける主要部移動 (Pesetsky & Torrego 2001, Baker 2009)、フェイズ理論 (Chomsky 2000)、およびChomsky (2008) のラベル付けアルゴリズムに基づいたGallego (2010) の提案するPhase Slidingを受け入れ、タイプ1-3の振る舞いの違いを説明できるような属格照合のメカニズムを提案する。

[D-3]

オリヤ語において、非情物主語が引き起こす、複文の統語的縮約

山部 順治

本発表は、オリヤ語 (印欧語、インド東部) の目的語制御構文を扱う。

統語構造に関して次を主張する。使役主 X が人の場合は、補文が無音の主語△を持つ(1)。X を非情物に換えた場合は、△がない(2)。

- (1) [人 X が Y に [△=Y V1 するように] V2 する]
- (2) [非情物 X が Y に [V1 するように] V2 する]

根拠は次の事実。X が人の場合は①～⑤が可能、X が非情物の場合は不可。

- (3) ① 連続2名詞句が目的格
- ② 被使役者 Y に係る遊離数量詞が主格
- ③ Y を再帰代名詞で指示
- ④ partial control
- ⑤ (補文動詞 V1 が他動詞で、その) 対象が1・2人称

なぜ、非情物主語が統語構造の縮約を引き起こすか、説明はこうだ。オリヤ語には文中の格配置に関し制約(4)がある。

- (4) 不可: ... 非情物主語 ... 主格の名詞句 ...

非情物主語の複文は、補文の主語△(これは主格の名詞句)があると、(4)のせいで不適格になる。△のない構造(2)を採ったときにだけ生き残る。

[D-4]

現代朝鮮語の逆条件を表す「副動詞 + とりたて」

黒島 規史

朝鮮語では日本語の「テモ」のように、副動詞にとりたての =to (も) が付き逆条件を表すことができる。主に「副動詞 + とりたて」のうち -ko=to を扱うが、同じく -kose=to, -(a/e)se=to についても言及する。本発表では、①逆条件を表す「副動詞 + とりたて」の意味的、統語的特徴を明らかにし、②「副動詞 + とりたて」がなぜ(逆)条件を表すことができるのか、という点について論じる。①について、-ko=to は主節が可能形で現れることが多いが、反対に条件を表す「副動詞 + 主題標識」の場合は主節が不可能形で現れることが多い。このように「副動詞 + とりたて」を研究する際には「副動詞 + 主題標識」との関係性を考慮することが重要である。②については、副動詞の表す時間関係と条件の連続性により条件の意味が生じ、=to の表す意味のうち極端の意味により逆条件になると主張する。

[D-5]

福清方言の使役構文

— “共” を用いた使役構文を中心に—

陳 学雄

漢語福清方言は中国福建省東南沿岸地域の福清市及び平潭県の一部で用いられ、漢語閩東方言の変種として系統づけられる。本発表は福清方言の使役構文について、その構造記述を行う。

福清方言では、一般的に統語的な手段を用いて、使役を表す。「使役者+使役標識+被使役者+VP(動詞句)」のような構文を取る。ただし、使役標識の差異により解釈が異なる。具体的に/kœ²¹/「叫ぶ」、/hau⁴³/「呼ぶ」で指示使役を、/lyɔŋ⁴²/「譲る」、/tɔ⁴⁴/「取る」で容認使役を、/kaŋ⁵¹/「強制する」で強制使役を表す。

一方、以上に提示した使役標識を用いることが出来ず、代わりに/kœŋ⁴²/“共”が用いられる例も存在する。この場合、被使役者の動作主性の有無に関係する。

“共”の原義は「共にする」という動詞である。“共”を用いた使役構文が他の使役構文と異なる特徴を持つのは、“共”が文法化の後、同伴者、動作の相手、ないし受益者などを標示する多機能性を持つ標識に変化したからだと主張する。

[D-6]

手続き的意味による中国語談話標識「怎么说」の分析

楊 雯淇

中国語の談話標識「怎么说」は、複雑か、または否定的で、微妙な情報に先行し、応答の開始、話題の推進、陳述の保持などの談話的機能及び、話し手の責任の軽減や聞き手の不快感の軽減などの対人的機能を持つとされている。しかし、「怎么说」の使用は上記の文脈に限られていないことや、聞き手の発話解釈の過程への影響について十分に検討されていないことなどの問題点がある。本発表では、関連性理論の枠組みで、「怎么说」は話し手が先行する話題を斟酌していることを聞き手に気づかせて、聞き手の高次表意の構築に制約を課す手続き的意味を持つという分析を提案する。また、先行研究で記述された談話的機能及び対人的機能は、この手続き的意味から聞き手の推論を経て得られる派生的機能であることを示す。本研究は、「怎么说」の談話分析的研究に認知的基礎を与え、「怎么说」の意味・機能の統一的な説明を可能にするものであることを主張する。

[D-7]

広東語の文末助詞 aalmaa3 の意味変化

飯田 真紀

中国語方言の 1 つである広東語は、文内容をめぐる伝達の態度を表し分ける文末助詞を豊富に持つ。本発表はこのうち aalmaa3 の多義性に着目し意味変化過程を論じる。aalmaa3 について、先行研究では命題の「自明性」の意味が専ら報告され、ほかに「確認要求」の語義があることは指摘が少ない。

本発表では応答の仕方を根拠に、「確認要求」義をさらに<正解確認>と<確約取り

付け>に分け、<自明命題伝達>と合わせて計3つの語義を認める。次いでこの3つの語義について、モダリティとその周辺の意味変化に関する通言語的知見を参照しつつ、コーパス調査で中間的用法に着目することで、多義性発生の語用論的契機を探り出し、以下の順序で意味変化したと結論づける：自明命題伝達→正解確認→確約取り付け。このように、既に間主観的機能に特化した語類である文末助詞においても、個別の語の意味変化の方向として、間主観性や命題成立の望ましさ性の増大が見られる。

[E-1]

“Wonder is NOT want to know”: 埋め込み疑問節を取る動詞の再考

楊 沐藝

本稿では、埋め込み疑問節を取る動詞 *wonder* と *want to know* の意味論的差異について考察する。従来の分析では、*wonder* が *want to know* の言い換えであり、*want* と *know* の合成意味を有すると考えられてきた。しかし本稿では、主に Roberts (1989) が提唱した modal subordination 現象における accommodation 操作の実行可能性の観察を基に、*want to know* と *wonder* が等価ではないことを示す。前文の主節にモーダル演算子が含まれ、主動詞が *wonder* か *want to know* となり、そして後続文に代名詞が現れる場合では、代名詞が前文にある疑問節に対する答えを指すという文脈を設定すれば、主動詞が *want to know* である文だけが容認される。これは、*want to know* が疑問節を取る際、*know* の補文選択の条件により、Answer 演算子 (Dayal 1996 等) によって疑問節を真の答えにする必要があるからである。それに対して *wonder* が同様な文脈で容認されないのは、Answer 演算子を取ることが不可能であり、後続文にある代名詞に照応情報を提供し得ないからであると主張する。

[E-2]

比較を強調する副詞の意味論

田中 英理

本発表は、まず、(1)にあるような英語の *even, still* 等を含む比較構文（以下、*even* 比較文）について、(i) *even* 比較文が持つ前提の特異性と(ii)形容詞のスケール構造への依存という現象を指摘する。そして、(i), (ii)に関して、*even* 比較文の前提における程度項が自由変項であり、コンテキスト上でその値を決定されるという分析を提示する。

(1) John is even taller than Bill.

- (i) (1)のようなeven比較文は、通常の比較文と異なり、原級文(*John/Bill is tall.*)を前提とする。しかし、一方で比較文(*Bill is taller than Chris,...*)に続けることもできる。このような前提における変化はなぜ生じるか。
- (ii) (i)によれば、even比較文は原級でも比較級でも前提にとることができるが、形容詞のスケール構造に依存して、Upper-closed scale形容詞は原級を前提にとることができないのはなぜか。
- (2) a. [前提：#Rod A is straight. / Rod A is straighter than Rod B.] Rod C is even straighter than Rod A.
 b. [前提：Rod A is bent. / Rod A is more bent than Rod B.] Rod C is even more bent than Rod A.

[E-3]

英語の名詞句内における特殊な一致現象

前川 貴史

英語の単数形可算名詞は通常限定詞を必要とし、そしてその両者の間には数の一致がある。この一般化の観点から以下の英語の名詞句の構造を考察する。

(1) those color shoes (COCA) / these size shoes (Hudson 2004)

これらの名詞句の主要部である shoes は複数形であるので、限定詞は義務的ではない。しかし、(1) では限定詞を省略することはできない。

(2) *(those) color shoes / *(these) size shoes

この構造の中で限定詞を義務的に必要とする要素は、上記一般化に従って単数形可算名詞 color / size であると言える。しかし、限定詞 those / these はこれらの名詞と数の一致をせず、主要部名詞 shoes と一致している。限定詞の義務性と数の一致が不可分であるようなメカニズムを持つ従来の分析では、この構造をうまく捉えることができない。本発表では、Head-driven Phrase Structure Grammar の枠組みで、限定詞の義務性と数の一致にそれぞれ独立したメカニズムを仮定する (Van Eynde 2006, etc.) ことにより、上記の一般化に反するように見える特殊な一致形態をもつ (1) の名詞句の構造に自然な説明を与える。

[E-4]

英語における不可算名詞、可算名詞の文法化とその意味的特徴について

金澤 俊吾

英語には、飲み物を表す不可算名詞が、可算名詞に変化する場合がある(Copstake and Briscoe (1995), Wechsler (2015))。この変化は、(i)飲み物を注文する際の単位、(ii)飲み物の種類のいずれかを言及する場合に見られることが指摘されている(Jackendoff (1991), Radden and Dirven (2007), 今井 (2015)など)。

本発表は、この変化が起こる際に見られる、文法化の過程と、各表現の意味的特徴について、名詞を修飾する形容詞と、共起する動詞に注目することにより検証する。具体的には、beer, coffee は、いずれも可算名詞への変化が見られるものの、各表現に伴う部分詞、数量詞(a {glass/bottle/can} of, a cup of)の文法化の違いにより、変化の度合いに違いが見られることを示す。beer の場合、可算名詞 a beerの方が、不可算名詞 a {glass/ bottle/ can} of beer よりも多く使われるのに対し、coffee の場合、不可算名詞 a cup of coffeeの方が、可算名詞 a coffee よりも多く使われる傾向にあることを示す。また、a beer, a cup of coffee は、意味拡張により、飲み物だけでなく、飲む「動作」や「事象」も表すことができることを示す。

[E-5]

スタイル副詞類として機能する if 節と挿入辞としての if 節についての考察

森 創摩

Dancygier と Sweetser は以下の (1) に見られる条件文を発話行為的条件文の一種として取り扱っている。

(1) If I may say so, that's a crazy idea. (Sweetser 1990)

本研究の目的は、(1) のような if 節はスタイル副詞類として機能することを論証することである。そして本研究では、if you don't mind / if I may / if you like / if you will のような、表現の凍結化が起こり Kaltenböck と Heine らにおいて挿入辞と扱われる例は、元々このタイプの if 節に fusion と phonological attrition が起こったという仮定を提示し (Brinton and Traugott (2005), Heine (2013))、その発達プロセスを明らかにする。そしてさらに、なぜこのタイプの if 節に起こったのかについての動機づけは、話し手 - 聞き手間の相互作用と関わっているからと述べる。

[E-6]

Let's における文副詞的用法及びその拡張について

鷺野 亜紀

人称を軸として連続的に様々な機能を生じる Let's は、形式上の動作主体が'inclusive we' であるために緩衝機能を持ち、さまざまな用法を拡張させる余地を持った形式である。本

発表では、典型的には主節に生じ、「勧誘」機能が中心的である *Let's* が、主節とは異なる機能で生起する興味深い二つの用法について考察する。

1) 文副詞的用法: 命題に対する話し手の姿勢を外在的に示すものとして 'Let's face it,' 'Let's be honest,' などの慣用的な形式が主節中あるいは従属節中に挿入され、'形容詞+ly' の形式の文副詞のうち 'style disjunct' と類似した機能を示すものである。*Let's* は叙述的な機能への傾きを示す。さらにその拡張としての、

2) 従属節を構成する用法: 1) で多用される慣用表現、さらには別の動詞が理由を表す従属節の命題そのものを構成する用法である。*Let's* は、望ましい状況を実現しようとする語用論的機能を獲得することで叙述へと傾き、それが従属節の命題そのものを構成する *Let's* の生起を可能にしたと考える。

[E-7]

インド英語における *general extenders* の特徴について

—内圏・外圏の他英語とのコーパスを用いた共時的比較分析—

高橋 真理子

General extenders (GE)は英語の会話で、効果的に意図や含意を伝える、*You should bring water, towels, and things like that* のような、接続詞と名詞句で構成された「曖昧表現」である。本研究では、ICE-IND コーパスのデータに基づき、インド英語の GE の形式・機能の特徴について、内圏・外圏の5つの英語(アメリカ・イギリス・フィリピン・香港・シンガポール)と共時的に量的・質的に比較、分析した。398例(52形式)のうち60.6%が文末に出現し、71.4%(30形式)が順接で、他英語に比べて順接の割合が高く、高頻度の出現形式にも違いがあった。他英語と同様、*set-marking*、曖昧度を高める、強調する等の機能が見られた。インド英語の GE の特徴には、会話を促進する語用標識の高頻度の使用や、英語の地域的特徴の発達が関係している可能性がある。

[F-1]

英語の述詞関係節の意味機能について

—不定先行詞の場合—

渡辺 良彦

本発表では、英語の不定先行詞に導かれた述詞関係節 ((i)(ii)の下線部) の意味機能を中心に論じる。(i) ... a fat man **searching for a thin man that he once used to be** (ii) ... by **finding a**

particular cook that Griswold isn't 不定述詞関係節について — ①先行研究：Hawkins (1980) の問題点、②分布：「内包的文脈」に生じる、③内部構造と解釈：河野 (2012) の「非制限的制限節」の一種で、空所の変項への代入により論理形式上「命題」と解釈、また(ii)では a と not との作用域関係から、先行詞の a N は述詞名詞句の a N と異なり一般量化子である、④意味機能：不定述詞関係節を含む名詞句全体の解釈には内包を対象とする必要があり、関係節は通常の限定修飾の *intersective* な形容詞 (e.g., *pink tadpole*: [[pink tadpole]'] = [[pink']] ∧ [[tadpole']]) のように *predicative* の機能ではなく、*nonpredicative* な *former* (e.g., *former senator*: *former'* (^*senator'*)) と同様に「属性演算子」(属性から属性への関数) とする分析の提案、関係節内の *be* に関して意味タイプ $\langle e, t \rangle$ から $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$ への「タイプ転換」(Partee (1987)) の必要性 — 主として以上 4 点を主張する。

[F-2]

動詞句削除部からの抜き取りに関する派生的カートグラフィー分析

前田 雅子

本発表では、動詞句領域にも豊かな左周縁部 ([*VP Asp Top Foc Voice* [*VP V*]]) が存在すると仮定し、動詞句は動詞句領域の *Spec, TopP* への移動の結果、削除部として標示されると提案する。この提案のもとでは、削除部からの抜き取りの禁止を話題化要素からの抜き取りの禁止と並行的に説明できる。さらに、左周縁部は下位の主要部から順に素性の主要部移動と内的併合により構築されると提案する。これらの提案の帰結として、動詞句削除部から要素が抜き取られる場合、*TopP* よりも下位の位置に移動する要素は削除部の *Spec, TopP* への移動より先に移動するため抜き取り可能であるが、*TopP* よりも上位の位置に移動する要素は削除部が *Spec, TopP* へ移動したあとに移動するために抜き取り不可能であると予測する。本発表はこの予測が動詞句削除部に関わる様々な構文で当てはまることを示す。

[F-3]

対併合の再定式化と不可視要素について

大宗 純

Chomsky (2013)によると、(セット) 併合 ((set-)Merge) は単純な非順序集合 $\{\alpha, \beta\}$ を作る操作である。さらに、Chomsky (2004: 117-118)によると対併合 (pair-Merge (i.e. adjunction)) は非対称性を生み出すような併合であるので、順序対 (ordered pair) $\langle \alpha, \beta \rangle$ を形成する。また、句同士が対併合すると「対併合した方」の句 (i.e. 付加詞句) は別の平面 (a separate plane) に付加するので見えなくなる (see Chomsky (2004))。主要部同士が対併合すると、「対併合さ

れた方」の接辞主要部 (e.g. v^*) は見えなくなる (see Chomsky (2015: 12), Epstein, Kitahara and Seely (2016))。

しかし、別の平面への付加や、接辞が見えなくなるという分析は理論的根拠に基づいていない。さらに、併合は本来単に集合を作る操作であるので、「併合した・された」のような方向の概念を併合に加えることも望ましくない。本発表では、集合論 (set theory) で一般的に用いられている順序対の定義を利用し、対併合は別の種類の併合ではなく、セット併合から派生したものであると提案する。また、その提案を用いることで、経験的事実を原理的に説明できることを示す。

[F-4]

two-peaked structure に基づく非制限関係節の分析

林 慎将

英語の非制限関係節 (Non-restrictive Relative Clause: NRC)は、内部にある NPI が主節の否定要素から認可されず、また、NRC 自体も *one* 置換や VP 削除の領域に入らず、制限関係節とは異なる特徴を持つ。即ち、NRC は主節から c-command を受けておらず、その点で主節から不可視となっている。

NRC が等位接続によって派生されるとする De Vries (2006)ではこの不可視性が説明できず、不可視性を説明しようとした Demirdache (1991)や Del Gobbo (2003)の分析は、現在のミニマリスト・プログラムの枠組みに沿うものではないために、NRC の不可視性とその派生は依然として問題となっている。

本発表では、counter-cyclic Merge が two-peaked structure を形成するとして Epstein, Kitahara, and Seely (EKS) (2012, 2014)の枠組みを援用し、NRC の不可視性とその派生の説明を試みる。具体的には、EKS (2012, 2014)は counter-cyclic set-Merge を用いて主語の派生を議論したが、本発表では、NRC では counter-cyclic pair-Merge が用いられると主張する。更に議論を展開し、V2 言語において NRC が要素の一つとして数えられない事実や、不可視性を持つ他の構文の派生についても考察する。

[F-5]

古典ギリシア語における関係代名詞中性形の接続詞的用法とその起源

應地 晴香

古典ギリシア語において関係代名詞が先行詞を持たないとき、名詞節としての挿入というよりはむしろ、関係節が様態の副詞節のように機能して主節全体を修飾していると考え

られる場合がある。この用法は関係代名詞 *hós* の中性形の *hó*, *há*、および強調の小辞 *per* の付いた *hóper*, *háper* で見られる。

関係代名詞の中性形が接続詞として機能する現象については印欧語全体で認められており、この用法は祖語の段階ですでに確立していたとされる。ただし、ヴェーダやアヴェスタでは関係代名詞中性形がそのまま接続詞として働くのに対し、古典ギリシア語ではそのような用法は一般に認められてこなかった。

今回用例を精査した結果、*hó* が名詞性を持たない例や従属節中に定動詞のない例などが見られたことから、古典ギリシア語についても関係代名詞の中性形に接続詞としての用法を認めることを提案する。さらにこの用法の起源についても、副詞的対格との関連を指摘したい。

[F-6]

アイルランド語の所有文における譲渡可能性について

山田 怜央

アイルランド語には「持つ」にあたる動詞がなく、所有文は「～にある」と表現される。その際、所有者を表示する前置詞は、①「～のところに」と、②「～の上に」という 2 種類が使い分けられる。この違いは①が「譲渡可能」、②が「譲渡不可能」に相当するものであると考えられるが、それを明確に記述した先行研究は見当たらない。

本発表では電子コーパスで当該言語における所有文を調査、この 2 つの前置詞の出現を見た。結果、②はその多くが身体部位に、①が親族名称（血縁関係／婚姻関係を問わず）を含むその他多くの名詞に用いられていた。また、抽象名詞では①が「知識」などの名詞に、②が「感情」などの名詞に用いられていた。「知識」は教授によって他者へ譲渡することが可能だが、「感情」ではそれが不可能であることが理由であろう。

以上より、当該言語における①と②の区別は、「譲渡可能／不可能」の区別に相当するものであると結論付けた。

[F-7]

イタリア語由来の借用語における母音長受け入れと位置の非対称性

田中 真一

本発表では、イタリア語から日本語に借用された語のとくに母音長受け入れに関して、記述・理論両面から一般化を試みる。記述的には、日本語が概ねイタリア語の強勢位置をアクセント位置として受け入れていること、イタリア語の強勢と日本語の外来語アクセ

ト規則がともに母音長受け入れに関与することを示す。まず、長母音が原語強勢開音節内のみに生起し、日本語化の長母音の対象となる（短母音が長母音として借用されることはない）ことを確認する。また、受け入れには位置の非対称が見られ、次語末の長母音がそのまま受け入れられるのに対し、語末3音節目のそれはむしろ短母音として受け入れられることを示し、これが、受け入れ言語（日本語）のアクセント規則に起因することを指摘する。発表の後半では、最適性理論による一般化を試み、上記の位置の非対称が、アクセントの期待されるフットの形成位置の違いによって定式化できることを示す。

[G-1]

東クシ諸言語の *converb* について

吉野 宏志

東クシ諸言語（アフロアジア語族クシ語派）で *converb* と分類され得る動詞形は、形態統語的に多様であり、一言語内に複数種類の *converb* が並存している場合もあることが知られている。先行研究では東クシ諸言語のうちオロモ語、アフアール語、サホ語を対象に、「類型論的に典型的な *converb*」と「定動詞に従属節化接尾辞などを付加した *converb* の機能的相当語句」の二種類の分類を念頭に置いた分析がされている。本研究では、(1)意味上の主語が標示されるかどうか、(2)動詞形の語基（動名詞、定動詞など）、(3)主動詞との統語的關係という三項目で、先行研究の対象言語にシダーマ語、アッレ語、ツァマイ語を加えて、東クシ諸言語における *converb* の分類を試みた。その結果、「意味上の主語を特別な接尾辞で明示する動詞形」という三つ目のタイプが存在することを確認した。

[G-2]

バントゥ諸語の関係節に見られるマイクロバリエーション

米田 信子

多くのバントゥ諸語において関係節の構造は類似しているが、それらの主名詞になりえる名詞との意味関係にはバリエーションが見られる。例えば、ヘレロ語、ベンバ語、ニャマンガ語ではいずれも主名詞と一致する関係小辞が動詞の前に置かれることで関係節がマークされる。形式は同じだが、ヘレロ語ではこの形式の主名詞になるのは「内の関係」の名詞のみであるのに対し、ベンバ語とニャマンガ語では「外の関係」の名詞も主名詞になりえる。一方、ヘレロ語とニャマンガ語では主語と主語以外の項のいずれの関係節化にもこの形式が用いられるが、ベンバ語ではこの形式を主語の関係節化に用いることができない。本発表では、12 のバントゥ諸語を対象にした調査の結果から、バントゥ諸語の関係節と主名詞との関係に見られるバリエーション、また「内・外」の関係よりも「主語と主語

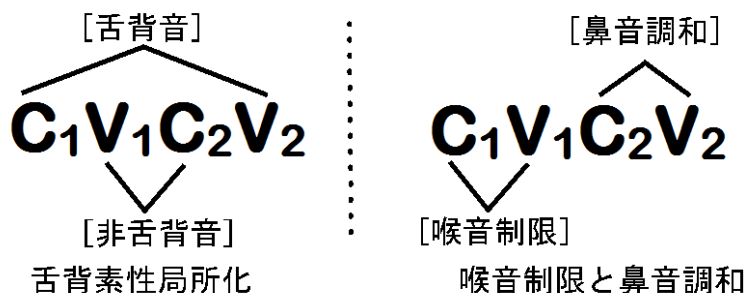
以外」という文法関係の違いが形式に反映される言語が少ないことを報告する。

[G-3]

コイサン音韻類型論：初期報告

中川 裕

従来の**広域標本音韻類型論**の行詰まりを打開するために**稀少特徴類型論**と**系統内類型論・地域類型論**を統合する新接近法を使い、コイサン3語族=言語地域の稀少音韻特徴の調査を開始した(科研費16H01925)。初期調査の結果、図に示す類型論的特徴の新仮説が提案される。舌背音は、語根両端C1_V2には現れるが、中央V1C2にはほとんど現れない。夥しい数のクリック子音はC1にのみ現れ、これも舌背が関与する。V1にとっては、舌背素性[±high, ±low, ±back]が非弁別的で、円唇性と喉音性(咽頭化・喉頭化)のみが弁別的だ。また、語根前半C1V1だけに喉音制限が、語根後半C2V2だけに鼻音調和が現れる。この極端な素性の偏在的棲分けはコイサン諸語特有の特徴である。



[G-4]

ジンポー語における有気音の無気音化

倉部 慶太

本発表では、ジンポー語に観察される5つの個別の音韻現象を有気音の無気音化という単一の異化規則の観点から説明する。1つ目の現象は子音目録のギャップであり、これを根拠として摩擦音 /s/ と /c/ を音韻論的に有気音と解釈する。2つ目の現象は使役接辞の交替である。接辞 $\text{c}\text{ə-}$ は有気閉鎖音の直前で $\text{j}\text{ə-}$ と交替するが、摩擦音も交替の引き金となる。摩擦音を有気音と見なすと使役接辞の交替は無気音化という異化規則として分析できる。3つ目の現象は総称名詞を形成する接辞 $\text{c}\text{ə-}$ の交替である。この接辞は使役接辞と同様の交替を示し、並行的にこの交替は無気音化と見なせる。4つ目の現象は動物接辞の交替である。接辞 $\text{c}\text{ə-}$ は摩擦音を含む有気音の直前で $\text{c}\text{ə-}$ と交替する。この現象も無気音化として分析できる。5つ目の現象は同一語中の音素の共起制限である。基本的に固有語では摩擦音を含

む有気音は連続して生起しない。この制限も無気音化の観点から分析できる。

[G-5]

ポポロカ語における重層的人称・数標示

中本 舜

ポポロカ語の人称・数標示は、2つの相互依存的なパラダイムが常に共起する重層的な体系である。接尾辞や語幹交替が動詞ないし名詞クラス毎に異なり人称のみを標示する一方で、後接語はクラスに関係なく現れ人称と数を同時に標示する。

本発表では以下5点を指摘する。(1) 語幹交替と接尾辞が1語内で人称を複数回示しうることに対し後接語が1度しか現れないこと。(2) 後接語の分布がクラスに依存しないこと、特に(3) クラス依存の形態と分析されてきた=a 2sgの実現がクラスでなく音韻論的環境に依存すること。(4) 後接語に人称ごとのスロットが存在すること。(5) =ná 1plが包括と除外を区別せず、接尾辞や語幹交替による区別に依存すること。

重層的なシステムの提案は、ポポロカ語の人称の multiple exponence の一部に形態統語論的な動機があることを示し、また語幹交替のみで人称が標示される例を提供する。

[G-6]

アラビア語エジプト方言の疑問詞の語順について

長渡 陽一

アラビア語エジプト方言は疑問詞「元位置」型 (Wh-in-situ) と言われているが、文頭移動する例もみられる。文頭移動はこれまで、焦点化など文体バリエーションとされてきたが、多くは擬似分裂文に対する説明であり、ē da? 「何+これ」のように文頭が標準的であるものは説明されてこなかった。

本発表では、エジプト方言の疑問詞位置の類型を明らかにするために、映画のシナリオに現れた疑問文を4つの構文(動詞文、存在文、コピュラ文、擬似分裂文)に分類し、疑問詞位置を観察した。その結果、動詞文と存在文では文頭移動はほとんど見られず、文頭移動するのはコピュラ文と擬似分裂文に限られることが明らかになった。コピュラ文には、元位置の例 (ismak eh? 「君の名前+何」) と文頭移動した例 (ē da? 「何+これ」) があるが、どちらも語順を入れ替えにくいことから、単に焦点化による違いとは言えない。また擬似分裂文では全て文頭移動していた。このように、構文によって疑問詞位置の型が異なるということは、構文によって情報・意味構造に違いがある可能性を示唆している。

[G-7]

コーランのユースフ章における接続詞 *wa-* と *fa-* の使い分け

榮谷 温子

本発表では、コーランのユースフ章（第12章、全111節）を分析し、*wa-* と *fa-* の談話における機能の違いを明らかにする。ユースフ章は、コーランの中でひとつの物語をもって終始する唯一の章であり、十分な長さを持つ一貫したテキストと言え、分析の対象として適している。

先行研究では、*fa-* の機能のひとつとして近接的な連続を表すことを挙げているが、翌日や長旅のあとなど時間的に離れた出来事を *fa-* で結ぶ例も見られ、*fa-* は時間的な近接性よりもトピックの連続性を示す働きが重要であることが見受けられた。これに対して、*wa-* は、特に主語の転換（*wa-* の前後で動詞の主語が交代する）と連動して、トピックを転換させていることが多い。また、*wa-* や *fa-* を用いずに場面を転換させる手法も用いられ、そのような場合は代名詞や固有名詞が場面転換のマーカールとなっている。

[H-1]

トルコ語における存在表現の文法化

ディリック セバル

トルコ語は存在を表す形式「*var*（ある）」と「*yok*（ない）」を持ち、「*var*」は存在を表し、「*yok*」はその非存在を表す。トルコ語の地域方言では存在表現の「*var*」において文法化が進行した結果、モダリティの意味を表すことがある。共通語における存在表現についての研究は多くの蓄積があるが、それとモダリティの関連についての研究は十分であるとは言えない。地域方言（トルコ北西部のチャナッカレ県サズル村で話されている方言）では存在表現の文法化がさらに進み、動詞の不定形「*-mAk*」に「*var*」が付加された「*-mAk vā/var*」という新たな文末形式を成立させている。

本研究はトルコ語の存在表現「*var*」が文法化によって生み出した文法形式とその意味内容を記述し、同じような形式が共通語の場合、話し手の意志を表す動的モダリティである一方、地域方言の場合は話し手の推論や推定を表す認知的モダリティであることを主張し、さらにその文法化の過程について検討する。

[H-2]

トゥバ語との対照から明らかになるサハ語の規則性と義務性

江畑 冬生

本発表ではチュルク諸語に属するサハ語とトゥバ語を、音韻・形態・統語の面から対照する。2つの同系言語の間には一見すると同様の音韻規則・文法規則が働いているようであるが、サハ語に高い規則性および義務性が顕著に見られる一方で、トゥバ語にはそのような規則性や義務性が見られないことが明らかになった。まず音韻において、見かけ上は同様の音韻規則（語末強勢規則・母音調和規則など）が両言語に適用されるように見えるが、トゥバ語の音韻規則が例外を含むのに対し、サハ語の音韻規則は適用範囲が全面的であることが分かる。次に両言語の形態統語法を比べると、サハ語では文法要素が明示的ないし義務的に現れる傾向があることが分かる。例えばいくつかの名詞句が並列的に用いられる時、サハ語では並列された名詞句それぞれに形態的標示を付与しなくてはならない。一方トゥバ語では、並列された名詞句の最後の1つにのみ形態的標示をすれば良い。

[H-3]

ダグール語の2種類の動詞否定形式

山田 洋平

ダグール語の動詞の否定形式には次の2種類がある。否定を表す語 *ul* を動詞の前に置くという方法 (1a.) と、動詞の形動詞形 (VN) の後に否定を表す語 *uwei* を置くという方法 (1b.) である。とくに非過去時制 (NPST) の場合に両者の使い分けが問題になる。

1) a. *ul oo-n* b. *oo-g uwei*

NEG to.drink-NPST2 「飲まない」 to.drink-VN.FUT no 「飲まない」

頻度が高く無標の否定と言えるのは a. である。b. のように *uwei* を後置するタイプの動詞否定形式は、「期待に反する」ことに対し説明を付与するものである (2)。

2) - *in yuguu ul ire-n?* - *in eudii-bei, tenne ire-g uwei.*

3SG why NEG to.come-NPST2 3SG to.be.sick-NPST so to.come-VN.FUT no

「彼はなぜ来ない？」 「病気だから来ないんだ」

ある種の肯定的な「期待」が表出される文を、形動詞形により名詞節化したうえでモーダルな側面から否定したのがこのタイプの否定形式なのであろう。

モンゴル語族の諸言語は、その動詞否定形式から *ul* を前置するタイプと *uwei* を後置するタイプに大よそ二分することができる。ダグール語はその中間的あるいは過渡的な状態にあるものと考えられる。

[H-4]

保安語積石山方言の話し手は文が表す事態をどのように捉えているのか

佐藤 暢治

保安語積石山方言の話し手は、文が表す事態を述部の違いを通じて二分（「I形式」と「O形式」）して捉える。その役割を名詞文、所在文、存在文と形容詞文では繫辞または存在動詞が、動詞文では動詞語尾が担う。「I形式」と「O形式」の使い分けを Todaeva (1964)は主語の人称との一致、布和 劉(1982)等は「確定」と「非確定」と見たが、問題がある。そこで、筆者がフィールドで収集した資料に従い平叙文を考察すると、次が明らかとなった。話し手に関わる事態には通常「I形式」が使われるが、話し手にとって非制御、非意図、予想外、仮定のこと、また話し手から聞き手に配慮が働く場合には「O形式」が使われる。一方、聞き手と第三者に関わる事態には通常「O形式」が使われるが、話し手の個人的な体験に関わる実現過程の把握、熟知、推測、また聞き手への反論には「I形式」が使われる。以上から、「I形式」は自己中心、「O形式」は非自己・他者中心を表すと言える。

[H-5]

フィジー語の接尾辞を伴わない他動詞

岡本 進

フィジー語の他動詞は動詞語根に他動詞派生接尾辞が付加された形式であるとされてきた。しかしフィジー語の動詞は、他動詞派生接尾辞が付加されていないにもかかわらず、統語的に2つの名詞句(すなわち主語と目的語)が出現しうる場合がある。本研究では、接尾辞が付加されている他動詞を「接尾辞形」、付加されていない他動詞を「ゼロ形」とする。

ゼロ形がすべての動詞で許容されるというわけではないということは従来指摘されてきた。しかし、先行研究では羅列的に例が挙げられているのみである。今回はゼロ形の成立条件を明らかにするため、コンサルタント調査と資料調査を行った。

調査の結果、以下の2点が明らかとなった。まず第一に、ゼロ形は他動性の低い動詞では観察されず、その目的語は典型的には theme である。第二に、接尾辞形は様々な統語環境で実現するのに対し、ゼロ形は主動詞としてよりも補文節内や名詞句として実現する傾向が強い。

[H-6]

イロカノ語における空間的直示表現の意味分析

山本 恭裕

イロカノ語（オーストロネシア語族、フィリピン）は空間的直示動詞とされる *umay* 「来る」と *mapan* 「行く」を持つ。一般に「来る」類動詞は話者位置への移動を、「行く」類動詞は非話者位置への移動を表すとされる (Fillmore 1971 など) が、本研究では映像の描写実験から得たデータに基づき、この分析がイロカノ語に適応可能かを検証する。本研究の主な発見は次の通りである。まず、*umay* は「話者位置」への移動ではなく、「話者領域（話者が自らの領域と見なす空間であり、空間的仕切りなどによって規定される）」への移動を表す。そのため、当該要素は話者と移動物の空間的位置関係そのものを表す訳ではない。次に、*mapan* は語彙的には直示性を持たない全般的な移動を表す。一般的に *mapan* は「非話者領域への移動」として解釈されるが、この直示的な解釈は *umay* との対立から生じる会話の含意であると分析する。更に、二要素の使用頻度は移動者の有生性に影響されることを報告する。

[H-7]

タガログ語のリンカー並行事態構文と節連結

長屋 尚典

タガログ語にはリンカーと呼ばれる語がある。本発表では、このリンカーのさまざまな用法のうち、*Naglalakad na pumasok si John*. 「ジョンは歩きながら入った。」のような並行事態構文に注目する。この構文については、用例の収集もその構文的特徴の分析もなされておらず、タガログ語の節連結の類型の中でどのような位置を占めるのかも分かっていない。そこで本発表では、この構文について、聞き取り調査・小説用例調査に基づき以下の主張をする。第一に、リンカー並行事態構文は本動詞で表現された事態に並行的かつ従属的に生じている事態を表現する。第二に、この構文の従属動詞は、本動詞の項についての二次述語になっている。第三に、この構文で従属動詞は、未完了形の活動動詞でなくてはならない。第四に、この構文は対格アラインメント制約を持つ。最後に、この構文の節連結のタイプは *Role and Reference Grammar* の類型にしたがえば、連位接続である。

■ポスター発表（12月4日（日） 11:30–12:50）

[P-1]

日本語の歯茎摩擦音に後続するウ音について

松井 理直

一般に、日本語のウ音は歯茎音や硬口蓋化子音の後で中舌化を起こすとされる。しかしこの点について、エレクトロパラトグラフィ (EPG) を用いてス・ツ・ズ音の調音動態を測定したところ、無声化を起こさない場合でも [z] と同様の調音が行われていることが分かった。一方、シュ音・ジュ音では明確な動態変化が観測された。このことは、日本語のウ音が [-palatal] 素性を持ち、歯茎摩擦母音というべき変異音を持つことを示す。さらに三音響管モデルに従うなら、[s], [z] 音が中舌寄りのウ音に類似した音響特性を持つことが計算できる。このことは、歯茎摩擦母音がウ音と理解される根拠になると共に、Brown (1863) でス音が “sz” として記述され、また斎藤 (2003) や 高山 (2014) においてス音・ズ音の母音が中舌寄りのウ音として解釈されている理由を説明できる。

[P-2]

理由を表す *wh* 付加詞と補文標識「の」の獲得

團迫 雅彦

本発表では、日本語の理由を表す *wh* 付加詞「なぜ」が文末の補文標識「の」と共起しなければならないという現象に着目し、桑原(2011)で提案された「なぜ」の認可に関する統語理論の妥当性を日本語の母語獲得のデータを用いて検証することを目的とする。桑原(2011)では「の」は Fin の位置を占める機能範疇であり、それが文内に現れることで CP 構造が活性化し、LF で「なぜ」が *wh* 素性を照合するために IntP まで移動することで文が派生されるとしている。この議論が正しければ、言語獲得に関して以下の二つの興味深い予測を生む。すなわち、(i) 日本語を母語として獲得する幼児は「の」の獲得が「なぜ」疑問文よりも前、もしくは同時期でなければならない。(ii) 幼児が発話する「なぜ」疑問文には「の」が必ず含まれていなければならない。これらの予測を CHILDES データベース(MacWhinney 2000)を用い検証を行ったところ、(i)と(ii)はともに予測通りの結果であることが確かめられた。

■ワークショップ (12月4日 (日) 10:00-12:00)

[W-1]

形態統語構造の音韻的外在化

企画・司会：時崎 久夫

統率束縛理論においては、言語間の差異を統語演算体系内部のパラメーターで説明する試

みながなされていたが、90年代初頭から、説明的妥当性や言語習得の点から、狭い意味での統語演算体系自体ではなく、その外にある認識可能な体系に言語間の差異を求めるようになってきた。すなわち、内的な統語構造物を外的な感覚運動体系で利用できる形に変換して外在化(externalize)する形態音韻部門が、言語の多様性を説明する上で重要な役割を果たすと考えられる。外在化は、広く言語学の各分野に関わるものであり、統語構造の線形化や形態的・音韻的現象など、様々な観点からの研究が必要である。このワークショップでは、各講師が、音韻論、韻律音韻論、統語論、類型論の各分野で、回帰的併合、解釈可能性、統語移動、語順について、分野間のインターフェースを中心とした研究を発表し、参加者との討議を通じ、外在化のメカニズムを明らかにしたい。

[W-1-1]

音韻論における回帰的併合

那須川 訓也

派生過程において、音韻系は次の二種類の役割を呈する。

- (i) 統語構造を感覚運動系が解釈可能な表示にする。
- (ii) レキシコンに蓄えられている形態素内音韻特性を、統語構造が構築されたあとに解釈する。

いずれにおいても、無の状態から音韻範疇を回帰的に併合して構造を構築する能力を音韻系は呈さないといえる。

これに対し、本稿では、音韻構造構築上の基本単位を、従来考えられてきた韻律点や分節ではなく、一值的でかつ独立解釈が可能なエレメントと呼ばれる素性(IUA?HL)であると思われ、それらが語彙化過程のもと、回帰的に併合されることで形態素内の音韻構造が形成されると考える。また、極小論に立脚したエレメントによる裸句構造を音韻表示で用いることで、韻律点や他の韻律(音節)構成素を言及することなく、エレメントの種類と階層構造上の位置づけのみを言及することで、音韻現象を分析することが可能となる。

[W-1-2]

音韻的外在化と解釈可能性

土橋 善仁

Chomsky (2013, 2015) のラベル付与アルゴリズムでは、概念・意図(CI)及び感覚運動(SM)インターフェースへの外在化の過程で同じラベルが必要であるとするが、外在化における解釈はほとんど検討されていないように思われる。たとえば、分散形態論の知見のもと、

名詞は [n R] という形をもち、R ではなく機能範疇要素 n がラベルになるとされるが、韻律領域の形成に際して、機能範疇は不可視的であるとされる (Selkirk 1984 など)。このことから、CI と外在化は同じラベルを必要とはせず、むしろ、CI で解釈されない要素が外在化で利用される、という解釈における非対称性原理を提案する。この仮説のもと、なぜ phase 全体ではなくその補部が音韻句として解釈されるのか、なぜ統語的に孤立した句がイントネーション句になるのかといった根本的な疑問に対し、原理的な説明を与える。

[W-1-3]

スカンジナビア語の目的語移動
—統語移動が音声部門から要請される一例—

細野 まゆみ

スカンジナビア語には、動詞が動くときに限り目的語代名詞も移動することができるという独特の移動現象がある (目的語移動、Holmberg 1986) が、文要素の移動が他の文要素の移動に依存するという現象は他言語に見られない。本発表では、目的語移動のイントネーション上の特徴から「スカンジナビア語において、目的語代名詞はダウンステップを引き起こすために移動する」との仮説を提案する。Labeling Algorithm (Chomsky 2013, 2015) の枠組みでは *Criterial Position* と呼ばれる位置に文要素が到達するとさらなる移動はできないとされているが、本発表では、目的語 (代名詞) がこの位置にいることを示したうえで「文要素は音声部門からの要請があるときのみこの位置からの移動が可能である」と定式化し、目的語移動は、統語移動が音声部門からの要請により起こる一例であると主張する。

[W-1-4]

名詞修飾の語順と音韻

時崎 久夫, 稲葉 治朗

ロマンス諸語、英語、ドイツ語、ロシア語などは、名詞を修飾する語句が名詞に先行するか後行するか、修飾句自体が主要部先行か後行か、修飾語句あるいは節が外置によって名詞から離れることができるか、などの点において異なる。ここでは修飾部として、語、複合語、句複合語、分詞句、冠飾句、関係節などを含めて考察する。発表ではまず、名詞とその修飾語句 (あるいは節) が同じ韻律句 (*prosodic phrase*) に入る、という音韻部門の制約を作業仮説として提案する。次に、その制約が名詞に先行する修飾語には適用するが、後行する修飾語には必ずしも適用しないことを観察し、それが外置の可能性の違いを生じることが述べる。最後に、韻律句の制約が、主要部名詞に先行する修飾語には適用するが、

後行する修飾語には必ずしも適用しないのはなぜか、また各言語で名詞と修飾部の語順が異なるのはなぜかについて、音韻論と統語論およびインターフェースの点から考察する。

[W-2]

イントネーション研究の新展開

企画・司会：窪菌 晴夫

日本語のとりわけ諸方言のプロソディー研究はこれまで「語アクセント」の記述が中心であった。一方、語や文節を超えたレベルのプロソディー分析は質量ともに少なく、プロソディー研究全体における注目度は高くなかった。

このような状況の中、近年になっていくつか新しい視点からイントネーション研究が行われつつある。その一つが、文レベルのプロソディー現象が語のアクセントにどのような影響を及ぼすかという研究、換言すると、語アクセントが疑問文などの中でどのように変容するかというのである。また、標準語のように文末上昇調で疑問文が表示される方言に対して、文末を下降させることによって疑問を表す方言の存在も知られていたが、類型論的に興味深い後者のタイプの方言イントネーションについても研究が進んできている。本ワークショップでは、疑問文や不定詞文などのプロソディーを題材に、これらの新しい研究の成果を報告する。

[W-2-1]

音調研究の方法としての「置換反復発話」— Warner (1997) の追検討 —

松井 真雪, ホワン ヒョンギョン

「置換反復発話」とは、直前の発話の分節音を別の分節音に置き換えた状態で、直前の発話の韻律特徴を反復する発話である。本発表では、疑問文の文脈で、通常発話と置換反復発話の韻律特徴を比較する。このことによって、韻律句内部でアクセントと句末境界音調が共起するような場合にも、置換反復発話が方法論的に有用であるか否かを検討する。

重要な結果として (i) 基本周波数の上昇や下降の有無やタイミングに関する特徴は、句末境界音調がアクセントと共起する場合にも、置換反復発話に反映されること、(ii) 置換反復発話は、通常発話と比較してピッチレンジが縮小することを示す。(i) から、置換反復発話は、アクセントの研究において有用であるという見解が支持・補強される。その一方で (ii) から、ピッチレンジの大小が有意味な韻律現象の研究において置換反復発話を導入する場合には議論の余地があることを指摘する。

[W-2-2]

長崎市方言における不定語を含む語・文の音調と複合法則

佐藤 久美子

長崎市方言は二種類の弁別的な音調を持ち、それらはピッチの下がり目のある A 型と、ピッチの下がり目のない B 型として音声的に実現する。複合語では変調が起こり、前部要素の音調や拍数によって全体の音調が決まる（平山 1951, 坂口 2001, 松浦 2014）。

本発表では、「誰」「何」といった不定語に形態素「モ」が後続した「誰モ」「誰にモ」などにおいても変調が生じることを指摘し、その現象が複合語と同様に分析することで記述できることを示す。また、長崎市方言では、「誰がりんごばくうてモよか（誰がりんごを食べても良い）」のような文において、不定語から「モ」までに高平ピッチが生じる（佐藤 2015, Sato 2016）。このような広範囲に生じる現象についても、複合語で生じる変調と同様の分析を行う。文レベルに生じるピッチパターンと語レベルに生じる変調を同様に分析することで、不定語に関わる音調について統一的な説明を試みる。

[W-2-3]

岡山方言のイントネーションの記述に向けて
—疑問文イントネーションを中心とした予備的考察—

三村 竜之

岡山県南部方言（沿岸部と島嶼部は除く；以下、岡山方言とする）は、アクセントに関する研究は豊富である一方、イントネーションに関する研究は皆無に等しい。近年、日本語諸方言のイントネーションの実態が明らかとなりつつある一方で、岡山方言は未だにイントネーションに関する基本的な事実すら記述されていない。そこで本発表では、インフォーマント調査によって得られた資料と母方言話者である発表者の内省観察に基づき、岡山方言のイントネーションの実態について報告を行う。特に疑問文のイントネーションに焦点を当てて、文末詞の有無や音調の型など疑問文イントネーションの諸側面を明らかにする。また、諸方言に関する先行研究が着目してきた種々の観点に基づき、岡山方言のイントネーションの類型論的な位置づけを試みるとともに、諸外国語との比較対照を通じて通言語的な考察も行う。

[W-3]

日英語比較統辞論研究の現在：自由併合理論における移動と埋め込み

企画・司会：小林 亮一朗

本ワークショップは、極小主義の枠組みにおける日英語比較統辞論をテーマに、3つのケーススタディから構成される。記述的妥当性を満たすべく Kuroda (1965)以降、日本語の様々な構文の記述的研究が成されてきた。原理パラメター理論では、日英語間差異について「なぜ」を問うた Fukui (1986)、Kuroda (1988)など重要な研究が説明的妥当性の達成に向け行われた。しかし極小主義では空範疇原理を始め、多くの原理が理論的根拠を失い被説明項となったことで、特定の構文を説明するための ad hoc な機能範疇や素性が多く仮定され、批判(Fukui & Sakai 2003,福井 2013)の対象になっている。それらを排除すべく、自由併合理論(Chomsky 2004)における移動と埋め込みに焦点を当て、3つの重要な現象: 「受動文」・「繰り上げ構文」・「難易文」について、より説明的に妥当な分析の提案を目指す。研究発表と討論を通じ、今後の日英語比較統辞論に関する理論研究への寄与を目的とする。

[W-3-1]

序論

小林 亮一朗

本ワークショップの目的を説明し、日英語比較統辞論の重要な先行研究の概観を行う。最後に3つの研究発表の内容についての簡単な紹介を行い、以下本論への導入とする。

[W-3-2]

日英語受動文の比較統辞論

小林 亮一朗

本発表はいわゆる間接受動文について、何故それらが日本語にあり、英語に無いのかという問いに、「語彙項目(Lexicon)の ϕ 素性の欠如」から説明を与えることを目指す。間接受動文については複文分析で派生されるという研究者間での見解の一致を見ている(Hoshi 1999)。最適な言語設計の観点から自由併合理論を採用し、普遍文法に受動態の派生として(i)移動と(ii)埋め込み方略、両方が存在すると仮定する。 ϕ 素性一致を欠く日本語は、自由な併合適用により(i)/(ii)両方が利用可能であるが、英語は(ii)の埋め込み方略が ϕ 素性一致により阻害されることを指摘し、ここから日英語受動文の言語間差異を導き出す。全体を通

して、「統辞部門は言語普遍的で、言語間差異は演算の入力である語彙項目の違いに帰着する」という Chomsky-Borer Conjecture (Borer 1984, Chomsky 1995)を支持する。

[W-3-3]

相理論と埋め込み文からの繰り上げにおける日英語間差異

杉本 侑嗣

本発表の目標は、日本語や英語などでの節を超えた A 移動に関する統一的説明を試みることにある。Chomsky (1973)以来、A' 位置から A 位置へ移動は不適切な移動として排除されてきた。英語やドイツ語の節を超えた raising は非文法的である一方、日本語の hyper-raising では節を超えた移動が存在する。このような現象が Chomsky (2013, 2015)で述べられているラベル付けアルゴリズム(labeling algorithm)、相理論(phase theory)、さらに主辞同士の対併合(Epstein, Kitahara and Seely 2016)の観点から説明を試みる。

[W-3-4]

難易文の統辞論と日英語間差異

永盛 貴一

本発表は、日本語の難易文(Tough-construction)の統辞的分析を自由併合理論(Chomsky 2008, 2013)と循環格理論(Bruening 2001, Narita 2007)に基づいて提示し、その理論的帰結を探ることを目的とする。極小主義の枠組みでの難易文の代表的な研究としては Inoue (2004)を挙げることができるが、本発表ではそれに対する代案を提示したい。再帰照応形「自分」、尊敬語化、二重目的語動詞、結果述語等を用いて統辞的性質を示し、日本語の難易文は直接受動文と同様に A 移動現象として分析するべきであると主張する。また難易文は日英語間で補文主語抽出に関して相違が見られる。日本語では補文主語が主文主語になることが可能であるが、英語ではそれが不可能である。この問題に対して、本発表では、日英語の難易形容詞は取り得る補文構造の大きさが異なるということと（日本語は vP、英語は CP）、近すぎる移動を禁じる普遍文法の原理(Fukui 1993, Erlewine 2014)との相互作用により、日英語間の差異が自然な形で説明されると主張する(Brillman and Hirsch 2015)。

[W-4]

ミニマリスト・プログラムにおけるパラメータの姿と働きについて

企画・司会：後藤 亘

本ワークショップでは、ミニマリスト・プログラムの現在の到達点(Chomsky 2013, 2015)からパラメータ化の問題をとりあげる。具体的には、普遍的メカニズムの $\text{Merge}(\alpha, \beta) = \{\alpha, \beta\}$ と多様性を捉えるパラメータの理論的關係を明らかにし、Chomsky (2015)が導入した「Tの強・弱パラメータ」を含むパラメータ化の提案が言語間の相違をどのように捉えることができるかを詳細に検討する。

[W-4-1]

言語はなぜパラメータ化されなければならなかったのか

北原 久嗣

原理とパラメータのモデルは、言語の多様性とその普遍的特性のパラメータ値の組み合わせにすぎないことを示した。動詞句を例にとれば、他動詞が目的語を必要とすることは普遍的特性であるが、動詞が目的語より前にくるか (bought flowers), 後にくるか (花を買った) は、主要部のパラメータ値 [±主要部先行] から導出された。しかし、そもそも言語はなぜパラメータ化されなければならなかったのか。この問いはミニマリスト・プログラムに重大な問題を提起している。本発表では、この問題の性質を明らかにし、パラメータ化の対象を最小計算および外在化との関係で捉え直す方向性を示唆する。

[W-4-2]

形態音韻的要素が narrow syntax に与える影響

野村 昌司

Chomsky (2001:2)は Uniformity Principle (UP)を言語研究の基本的な方向とし、narrow syntax において言語間の相違はなく、変異は外在化に関連する要素 (形態音韻的要素)に限られると提案している。本発表では、空主語言語と非空主語言語間の相違を外在化と密接に関係すると思われる pair-Merge (head movement)の適応可否から捉えられると提案する。この提案が正しいとすると、Chomsky (2015)が提案する「Tの強・弱パラメータ」は必要なく、pair-Mergeの可否によって、例えばCがTの接尾辞になれるかどうか等で決まることになり、変異を形態音韻的要素に限ることができる。この結果、ラベル付けが可能な主要部を相主要部(C, v), 不可能な主要部を非相主要部(T, R), と相対的に捉えることができる。

[W-4-3]

非相主要部の一般化と素性継承の新たな根拠：言語の普遍性を追求めて

後藤 亘

Chomsky (2015)は主語と動詞の一致が貧弱な言語（例：英語）のTは「弱く」、主語と動詞の一致が豊かな言語（例：イタリア語）のTは「強い」と提案した。そして、Tとは異なり、全ての言語においてVは普遍的に「弱い」と主張した。本発表では、「Tの強・弱パラメータ」を排除し、非相主要部のTとVは普遍的に「弱い」と提案する。この提案により、空主語現象と空目的語現象に対して統一的なラベル付け分析を与えることができると論じる。また、提案システムの帰結として Chomsky (2015)の枠組みでは（句構造の派生を収束させる上で依然として重要な働きをしているのもかかわらず）その存在意義が不明瞭になりつつある素性継承に対して新たな理論的根拠を与えることができると主張する。

[W-5]

統語・意味解析情報付き日本語コーパスの構築に向けて

企画者：プラシャント・パルデシ，司会者：吉本 啓，コメンテーター：福島 一彦

従来公開されてきた日本語コーパスは、文の文節への分析を基礎として、形態素解析情報および文節間の係り受け関係をタグ付けしたものが中心であった。しかし、文の意味を直接反映する構造は句構造であり、言語学者が必要とする深い情報を文節とその係り受け関係から自動的に得ることに限界があることから、文の統語解析情報（句構造）をアノテートした日本語コーパス（ツリーバンク）の開発に着手した。このコーパスは、各文に対して意味解析情報（論理意味表示）が付加されているという特徴を持つ。本コーパス開発の動機、特色、アノテーション方式、および意義について解説し、具体例のデモンストレーションを行ってコーパスについて理解を深めるとともに、参加者からのフィードバックを得て今後役に立つことを目的としてワークショップを行う。

[W-5-1]

イントロダクション

プラシャント・パルデシ

日本語統語・意味解析情報付きコーパス開発の動機およびプロジェクト概要について説明する。本コーパスのアノテーション方式としては、ペン通時コーパス (Penn Historical

Treebank; Santorini 2010) のものを採用している。この方式は世界の多様な言語のコーパスに利用されていることから、言語間の比較や対照が容易であり、コーパスを利用した対照研究や類型論研究を可能にする。統語情報のアノテーションは表層的、中立的なものであり、特定の形式言語理論にコミットしていない。6年間のプロジェクト期間中に5~6万文からなる日本語コーパスを構築する予定である。例文のローマ字化も行い、また初心者も利用できる簡便なインタフェースとともに公開するので、コンピュータ処理の習熟度や言語の壁を越えた幅広い利用が期待できる。

[W-5-2]

アノテーション方式とコーパスの特色

吉本 啓

ペン通時コーパスのアノテーション体系に従いながら、日本語の実情に適合し、論理意味表示を出力するという目的を果たすために必要なアノテーション方式を編み出した。句に付けられるラベルには、必要に応じ機能表示が付加される。さらに、必須格名詞句が省略された文に対しても、ゼロ代名詞のタグ付けにより正確な統語・意味解析情報を提供する。また、各文に対しタグ付けされる意味解析情報にもとづいて、文を構成する語や句の間の統語・意味関係（依存関係）がすべて明示されるが、このことは様々な文法情報の自動的な獲得を可能にする。このように、本コーパスは、十分な日本語データについて複雑な構文も含めて正確な統語・意味解析情報を提供する最初のコーパスであり、簡便なインタフェースの開発により、言語情報処理技術に通じていない研究者にも構造体をピンポイントで検索することを可能にする。

[W-5-3]

デモンストレーション

アラステア・バトラー, 窪田 愛, 窪田 悠介

本プロジェクトにおいて開発を行っている、コーパスの利用を容易にするためのユーザー・フレンドリなインタフェースについて解説する。まず、構築されたコーパスの表示において、テキスト中のすべての文について、形態論・統語論情報がリンクされていて簡単に表示でき、また前後の文脈についても簡単に知ることが出来ることを示す。次に、入力された語句に相当するデータを形態・統語論情報や頻度情報とともに KWIC 形式で出力するインタフェースを開発しており、語句の形態・統語論的な用法について知ることが出来る。最後に、あらかじめ与えられたサーチ・パターンを利用して、関連する

構造体 (constructions) や統語情報を検索するパターン・ブラウザがある。一度使用した木構造にユーザーが手を加えることによって、別の関連する統語パターンの検索が可能になり、強力なツールを提供する。

[W-5-4]

まとめと将来の展望

プラシヤント・パルデシ

各々のプレゼンテーションについて総括を行うとともに、本コーパスプロジェクトが日本語研究全体において持つ意義を述べ、さらに他分野の研究との関連で果たす役割について考察する。